勝福寺寺報

ひびき

第105号

2023年1月1日

南無阿弥陀仏 ～人と生まれたことの意味をたずねていこう～

秋季彼岸会並永代経法要

「バイオリン・デュオ」

キム 優夏（ユナ）

キム 花夏（ハナ）

（山本・後藤美代子さん孫）

昨年（二〇二二年）の七月八日、安倍元首相が山上徹也容疑者に暗殺された。政治的動機かと思いきや、統一教会（世界基督教統一神霊協会）によって家庭が破壊された恨みを晴らすためだという。宗教は人を救うものでなかったのか。

カルト教団に入信した親に育てられた「宗教二世」の証言を聞くにつれ、人間の根底に「畏れ」のあることを思い知らされる。

カルト宗教は、人間が根源的に抱えている「畏れ」をえぐり出し、それを増幅し、ついには人間を畏れの虜にして、思考の自由を失った信者から心も物も奪い尽くしていく。

人間の一生は、ぬくぬくと護られた胎内から、無防備なままこの世に生み落とされたことから始まる。家族も環境も自分で選ぶことができず、次々と押し寄せる荒波の中を死ぬまで泳ぎ続けていかねばならない。だから一生は「畏れ」と共にある。

今日の運勢が気になるのも、神仏に掌を合わすのも、ひいては保険に入ったり軍事同盟を結んだりするのも、その根っこにあるのは「畏れ」である。

強そうに振る舞っているプーチンも、習近平も、金正恩も、いかなる原体験を持つのか知らないが、深い畏れに突き動かされて、力で世界に君臨しようとしているに過ぎない。

私もまた例外ではない。心の奥底深くに「畏れ」を抱え、その「畏れ」に振り回されてこれまで生きてきたし、今も生きている。仏教の教える五怖畏（死畏・不活畏・悪名畏・堕悪道畏・大衆威徳畏）こそ私の奥底にあって私の日常を支配している心である。

そんな私たちを悲しまれて、阿弥陀如来は「一切恐懼、為作大安」（すべての畏れるもののために、私は大いなる安らぎとなろう）と誓って下さった。

親鸞聖人は、「私はこのご本願を信じます。あなたは、どうされますか」と、私たちをお待ち下さっている。

（知道）

五怖畏

発行：真宗大谷派響流山勝福寺　〒879-0471 宇佐市四日市1426 TEL 0978-32-1806　ホームページ;kouruzan-shoufukuji.com

御名を聞く会（9月28日）

お浄土の入り口に

渡辺愛子
（仏典童話作家）

最初の仏縁

今回は、お念仏に出会わせていただいてから今日までの五十五年間、私の中にお浄土というものがどのように収まって下さっているのか、それを話させていただこうと思います。

私は大谷大学に入るまでは、「浄土」という言葉は知りませんでした。しかし、有り難いことに仏縁は小学二年の時から恵まれており、両親がご縁をいただいた教団で、父母が聞法する間、弟妹を庭で遊ばせながら、スピーカーから流れてくる「あるとき、お釈迦様は・・・」という、お釈迦さまの話やジャータカ（前生譚）を毎回聞いていました。

家は「貧乏人の子だくさん」の見本のような家でした。父は寝たきり、私は母の連れ子、その下に弟一人妹三人がいて、さらに父の父親と父の妹の九人家族でした。借家で今夜食べるご飯もないような貧乏生活でした。

母は朝から晩まで父にがみがみ言っていましたが、あるとき母が一枚の写真を出して「あんなろくでなしはおまえの父親じゃない、これがあんたの父親だ」と言いました。それを父はどんな思いで聞いていたでしょう。

その頃、母は幼友達の誘いを受け、すぐ近くにあった孝道教団に入りました。家から歩いて行ける距離なので、私も弟妹を連れてお山通いをしました。母は父に小言をあまり言わなくなり、お針の仕事をしたりして、食べることの心配も少なくなりました。私も高三まで、先輩達に混じって『法華経』の勉強をしたりしました。それが仏教が毛穴から入ってくるようになったきっかけだったと思います。

教団を離れる

そんな私に定時制高校四年の時、人生の転換期がありました。S教団が孝道教団に対し撲滅運動を始めたのです。そんなもの放っておけばいいのに、孝道教団も受けて立とうとしました。それが引き金となって、私は孝道教団を飛び出してしまいました。「ここだけで過ごさなくていいよ。広い世界に行って、もっと広い仏教を勉強してきなさい」と、飛び出すご縁がはたらいて下さったんだなと、今にして思われます。

しかし、それによって信仰という大事な杖を自分からほかしてしまい、頼りになるものがなくなったんですね。「こうやって生きてて何になるの？」と。何の張り合いもない、ご飯の味もない、家の中にも私の居場所がなくなってしまいました。

大学の夢も破れて

私は家計を助けるため、小学生の時からよく働いてきました。小六の時は夏休みの一ヶ月間、一日七〇円のアルバイト。中学の時は旅館で寝間着を洗ってのりを付ける仕事。中卒でNECに就職しましたので、高校はNECの近くの定時制高校に。しかし、四年になった時、先生の強いすすめで大学に入るため新宿高校の定時制に転校しました。

ところが、大学に行くために貯金していた奨学金を、家の借金を支払うために全部差し出すことになってしまったんです。それで、学校に行くことも意味がなくなってしまいました。毎日、今夜にしようか、今夜にしようかと、睡眠薬のビンをカバンの底に入れていました。

一枚の落葉

ところが、そんな私のことを、隣の席の彼女が気づいていたんですね。帰り道で、「あなた、大事なこと隠してるでしょう？それを言わないと今夜帰さないわよ」って言うんですよ。

私の思いを話したら、彼女が「あなたの問題は『歎異抄』よ、『歎異抄』を読んだらいいわよ」って言うんですね。そして「明日も来てね！」って言ってくれました。次の日、学校に行くと、彼女は私を校門で待っていてくれました。

次の日曜日、彼女の家に招かれました。彼女の家は豪邸に見えましたね。お茶とケーキを頂きながら、彼女がなぜ定時制に来ているのかを聞いて、脳天をガーンとやられたように思いました。貧乏以外にも人間の苦悩があることを、身をもって知らされました。

それから散歩に誘われました。武蔵野の雑木林に夕日が差して、とても静かなんです。そんな中、ドングリの枯葉を踏んでいくと、命を生き尽くしたドングリの葉っぱさん達のいのちの讃歌を聞くようでした。

そうして歩いていたら、一枚の緑色の葉が目にとまりました。見るとポツンと黒い点がある。その時「これは私じゃないかしら」と。まだ若いのに、病気か虫に食われたか解らないけれど、ドングリの一生を尽くさないまま散った葉。それを見て、私は、「こんな事で勝手に命を絶とうなんて、とんでもない。もう一遍考え直さなきゃいけない」と思えたのです。

はじめて聞くお念仏

だけど、どうしていいかわからない。そんな時に、ご縁というものがあるんですね。前の定時制高校で出会った橋本忠治先

生を思い出し、先生のお宅へ伺いました。そして、「私はもう家にはいられない。京都へ行き原始仏教の勉強をしたい」と申しました。そしたら先生は即座に「大谷大学に行きなさい。あそこには今、世界的に有名な原始仏教の学者が二人おられます。私の恩師である佐々木現順先生と山口益先生です。その上、百年に一人も出ないような素晴らしい方が同時に二人（曽我量深先生・金子大栄先生）もおられます。だから、あそこに行きなさい」とおしゃいました。

その言葉を聞いたら、もう「はい」と言うしかないんですけど、「はい」と言えないことが一つあって、「実は大学に行くために貯金していた奨学金を家の事情で全部なくしてしまったので、来年すぐってわけにはいきません」と申し上げました。そしたら、先生は「道は開かれるもんです。あなたはあなたの今日やるべきことをすればいいんです」と言われました。

私は黙ってうつむいていたら、すり切れた絨毯が見え、先生はこんなつまらない生活をしていらっしゃるのかと驚きました。また、その時、先生が小さな声で申されているお念仏の声が聞こえてきました。それが、私が生まれて初めて耳にしたお念仏でした。私に聞かせようという声ではなく、息のようにお念仏がずっと出ていらしたんです。

京都へ

それから間もなくして、先生から「あなたを求めてきましたよ」と連絡がありました。「大阪の高槻にある浄土真宗大谷派のお寺さんが、終戦直後からずっと戦災孤児のお世話をしておられ、今は崩壊家庭の子供さんたちの養護施設をしている。そこの職員が急に足りなくなり、誰かいないかと、あなたを求めてきましたよ」と。

お話を聞くと、「昼間は大学に行ってよいが、それ以外の時間は全て子供さんたちのお世話をする。お給料はあんまり高くない。でも、お部屋もあるしお食事もついてます」と。本当に先生がおっしゃったように、道は向こうから開かれたのです。

それで、私は卒業を待たず、十二月一日に赴任しました。そこには女の子13人、男の子12人がそれぞれの棟に分かれて住んでいました。女の子たちと一緒に寝泊まりするのが私の仕事でした。そこで初めての経験をいろいろするうちに、大学に行くよりこの子たちと暮らすほうが大事だと思うようになってしまいました。

お念仏の渦に包まれ

そうこうしているうちに大学受験があり、入学式になりました。入学式で男性合唱団が歌う大学歌のすばらしさに身震いしました。私は生まれてこのかた真宗のことを何も知りませんから、内容はわからないまま聞いていたのですが、そのうちに皆さんのお念仏が聞こえてきました。それこそ橋本先生が小さな声でおっしゃっていらしたお念仏なんです。

前にいた孝道教団では「念仏は、学問ができなかった時代、学問しなくても簡単に覚えられる南無阿弥陀仏の六文字を教えて、こと足れり、としたもの。今は、皆が学校に行ける時代で、お経も読めるし、講義も聴ける。だから念仏は、去年のカレンダーみたいなもので、今の時代には間に合わないもの」と教えられてきました。だから入学式でお念仏の声の渦の中にいて、私は身の置きようがなかったのです。

「念仏は去年のカレンダーで、今では間に合わないもの」のはずはないと、大きなショックでした。

お念仏がお浄土の入口

その後、私は子どもたちのお世話をする仕事をあきらめて、大学の授業と高倉会館での聞法そして図書館に通うことに専念して励みました。しっかりとうなづけない時間が長くございました。しかし、曽我先生、金子先生、西元先生、東昇先生と、次々と多くの先生方が真剣に教えを伝えようと叫んで下さいました。それが今、胸の底からうなずけるんです。先生方が「この道こそ」と、自ら歩んで勧めてくださっている道だから、たとえ後ろからトボトボであろうとも、私もこの道を歩んで行こうと決まってきたんですね。

お念仏の出ている時、出ている場所、そこがお浄土の門、入り口になっていてくださり、いつのまにか私の口からお念仏が出て下さるようになりました。それも自分が決めたのではない。ご縁とご恩の波の上にずっと浮かばせて頂いて、今日ここまで来させて頂いております。

私は欲望も恨みもある煩悩ずくめの身であるけれども、それを超える世界をもっておられる先達の方々に次々とお出会いすることができました。そのおかげで私もお浄土の入り口におらせて頂くことができるという幸せに恵まれているのでございます。

（抄録）

ご法話はユーチューブで聞けます。左のQRコードを読み取るか、勝福寺のHPからお入り下さい。

前半

後半

渡辺よしまさくん
（福岡県・志免中央小一年）

ご門徒さん こんにちは！ 第二十五回

同行二人の人生です

牧本　和孝（四日市）

今回は、ひびき80号の四国巡礼の記事で紹介した牧本和孝さんをお訪ねしました。

牧本さんはその後も８００キロに及ぶヨーロッパのキリスト教巡礼地を47日間かけて巡ったり、京都のご本山と吉崎御坊の間を蓮如上人の御影像を一週間かけて運ぶ御影道中に四回も参加したりしています。

そして勝福寺の運営にも総代会の事務局長としてお寺を支えておられます。

長崎諫早がふるさとです

牧本さんは昭和21年に長崎県諫早市に生まれ、現在76歳です。生家は農家で兄弟は兄が３人、姉３人の７人兄弟の末っ子です。

目の前には、有明海と普賢岳が見える風光明媚な場所で育ちました。

高校卒業後は、横浜の大学で機械工学を学びました。そして下宿先には長崎の先輩がおり、その人はアルバイトで医院の夜間の留守番兼用心棒みたいな仕事をしていたそうです。その先輩が翌年卒業したので、その仕事を引き継ぎました。

卒業後の就職先は、東京の江東区に本社がある化粧品や食品等の容器をプラスチックで製造する吉野工業所でした。そこで大学で学んだ知識を活かし、金型設計に従事しました。

以後本社や宇佐、そして栃木や豊前工場の工場長を勤め、最後は豊前工場を定年で退職しました。そして退職後も関係者から新しい会社を起こすので、その会社の営業を担って欲しいとのことで７年間勤めました

牧本さんは、会社に就職した25歳で結婚しました。相手は一つ年上の絹枝さんで久留米出身のとても魅力的な女性でした。出会いをお尋ねすると牧本さんが大学時代、アルバイトをしていた医院に勤めていた方で、その時に知り合ったそうです。

奥さんの支えがあってこそ！

家族は奥さんと長女、双子の次女、三女の５人家族でした。典型的な会社人間だった牧本さんが、仕事に専念出来るように家庭のことはもちろん近所つきあいも含め、ほとんど全てを奥さんが担っていました。

昭和53年に宇佐工場の立ち上げで宇佐に赴任し、55年には四日市の小菊町に家を建てて42年経ちました。その間、３人の子供達はそれぞれ結婚して子供もでき、すぐ近所に住んでいます。特に三女は牧本さんと二世帯住宅を建てて一緒に住んでいます。

順風満帆そうな牧本さんですが、実は奥さんが１９９２年にＣ型肝炎にかかり、数度に及ぶ抗がん剤治療や手術の甲斐もなく66歳でお亡くなりになりました。

退職後は二人でゆっくり旅行をしようと楽しみにしていたそうですが、その約束を果たすことが残念ながら出来ませんでした。

いつも同行二人です

２０１４年に奥さんの三回忌を勤め、それを機に会社も辞め、完全にリタイアしました。そして翌年の３月に心の内を整理したい、空っぽになれたらという思いで四国遍路に出立（しゅったつ）しました。その時は勿論、牧本さんは行く先々には必ず奥さんの写真をリュックに入れていつも一緒に同行二人で巡っているそうです。

亡くなった奥様とお孫さんの写真と一緒に

今はコロナで活動が制限されていますが、牧本さんは落ち着けば、「今までひたすら歩くだけで余裕がなかった。今度はもっとゆっくり歩いて周りの景色も楽しみたい」と。そういう希望があるそうです。

勝福寺の特徴と課題

そんな牧本さんに勝福寺の役員などをしてお寺に関わってみて勝福寺をどう感じるか、尋ねました。

「勝福寺は他のお寺ではあまりやっていないことを熱心にやっている。たとえば毎月28日にしている「御名を聞く会」など。それも門徒さんだけでなく、他門徒の方にも門戸を解放している。そして、お寺に来てる方々の付き合いが濃密で雰囲気がとても良い」。

次に勝福寺に要望はないか尋ねると、「難しいだろうが、若手の人や子育ての終わった人たちの集まる機会があればいいと思う。つまり今まで培ってきた伝統をどうやって繋いでいくか、繋いで行かないと今来ている人たちはだんだん抜けていくだけ。これが一番の課題と思う」と答えてくれました。有難うございました。

どうぞもう一度、四国やヨーロッパなどをゆっくりと楽しみながら、同行二人で巡られて下さい。

（文責　渡辺　重昭）

親鸞聖人関東御旧跡巡拝

11月1日から4日にかけて、念願だった関東の御旧跡を尋ねてまいりました。参加者の感想を添えてご報告します。

武田方子・漫画

川島先生が親鸞聖人と一緒にお出迎えくださった巡拝の旅は、諸処に聖人の息吹を感じる旅でした。　渡辺和義

草庵の大樹に寄れば野紺菊　吉武康子

小島草庵跡

聖人の息づく大地大銀杏　知道

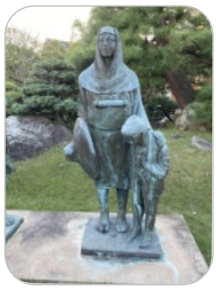
弁円の懺悔の涙護る寺　純子

大覚寺

秋空に親鸞さまの法（のり）の風

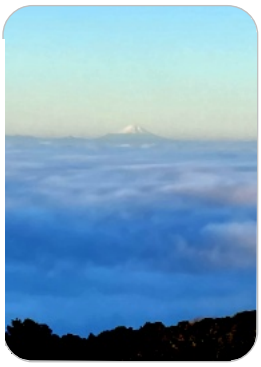
松尾由美子

小春日に祖師を尋ねて歩む道　大江尚子



花一輪吾子（あこ）いとおしや恵信尼公　香田紀子

信願寺



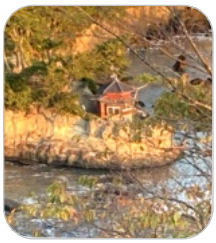
目が覚めて雲海のかなたに白き富士　矢野岸子

聖人の田植え歌読む
草紅葉　本多加代子

寺々に育まれた大木に感動し「心を弘誓の仏地に樹て…」と、私も命の大樹を育みたい。　岡本照子

上宮寺

弁円の如き僧打つお蕎麦かな　佐藤麗子



五浦海岸

浜菊と波濤織りなす六角堂　牧本和孝

報恩寺

親鸞聖人の若い頃のお木像をはじめて目にし、衝撃でした！まだまだ真宗の教えを学びたいと思います。　長藤朋子

不思議なご縁で、御旧跡巡拝の旅に、私たち夫婦も新潟から参加させていただき、とてもよい想い出となりました。　佐久間辰夫・綾子

草原をこぎ分け行けば唯円の道場跡に湧く泉あり　川島弘之

後半生をいきいきと

渡辺久仁子（常徳）

私にとって令和四年の一番の出来事は、車の運転をやめた事である。今年は免許更新と車検が重なっていた。視聴覚の衰えや反射神経等の鈍化を自覚する事もあり、勇気を持って決断した。一人暮しの私は大きな事故発生の折、責任を取りきれない、というのが最大の理由である。

私が今一番時間を費やしているのが畑作業である。一人では広すぎる畑を友人と三人で分割し、各々自由に行っている。作物はほとんど同じで、収穫時が多少前後したり大小等があるが、互いに情報交換し、刺激を受けつつわずかばかりの競争心を燃やしながら楽しんでいる。

共同で行う一番の利点は誰かしら畑に来るため、外に出る機会を得、会話し、笑い、土と馴じめる事を喜んでいる。

また万人同様、命尽きるまで自立していたい、という目標を掲げ体操教室、生涯学習に籍をおいている。

75才の自分を省りみれば、昔、大人の人に対して漠然と持っていた人間像とは異なり、未熟で自己中心的な自分に愕然とする。人生の越し方によって後半生は大きく違ったものになるだろうとは容易に想像できるが、これが現実なのだと受け入れざるを得ない。

こんな私も勝福寺門徒として70才前後より聞法の末席に座らせてもらっている。私の聞法の実情は御法話の理解度まことに乏しく、大方は素通りしているのではないかと感じます。

このようにいまだ聞法の入口あたりで、右往左往していますが、御縁をいただいたご法話の少しでも私の魂の奥底に響き、いつか私に語りかけてくれる日が来る事を願ってやみません。

これからはもっと真剣に聞法させて頂きます。

合掌

勝福寺写真日誌

秋季彼岸会並永代経

9月23～24日

法話

焼香

感話

裏庭の塀の改修工事完了

工事後

工事前

ゆきこ結婚式

10月9日

岩手県花巻市の旅館で仏前結婚式を挙げました。花嫁衣装は40年前に坊守のお母さんが縫ったものです。

前坊守白寿のお祝い

10月23日

戦争の中で青春を過ごし、なれぬ寺に嫁ぎ、4人の子どもを抱えながらわがままな父に仕え、坊守をつとめた母。子、孫、曾孫が集まって感謝！

勝福寺報恩講

日時　1月21～22日（日）
　　午後1時半～

講師　太田浩史先生
　　（富山・大福寺住職）

講題「親鸞聖人五つの謎」
①比叡山時代の謎
②玉日と恵信尼は別人か
③六角堂夢告の意味
④弁円の懺悔
⑤『教行信証』はなぜ書かれたのか。

＊今年はコロナ感染予防のため、御斎はありません。

編集後記

今回の「ご門徒さんこんにちは」は、牧本さんをお尋ねしました。

牧本さんは山登りやウォーキングを趣味としています。そのウォーキングは勿論、いつも奥さんとご一緒だそうです。その話しをお聞きしながら、自分を振り返ると「お恥ずかしい」かぎりです。すぐには変わりませんが、考えてみる余地は十分ありそうです。

渡辺重昭